

故村田一男顧問を偲ぶ会

八千代市の板碑集成と村田顧問

藤由美

はじめに

それは24年前の1999年4月、宗吾霊堂の旧庫裏での八千代市郷土歴史研究会の定期総会の後のこと。雨の中、霊宝殿の前の2基の黒く大きな石碑を前にして、当時会長であった村田一男顧問は、「これが中世の下総型板碑」と紹介されながら、丁寧に「板碑」の説明をされました。私にとっては、市内の小型の板碑や神野の下総型板碑などしか見たことがなかったので、この時の村田顧問の説明により、より広い視野で「板碑」について知り、興味を持つきっかけにもなりました。

板碑は、鎌倉時代から室町時代に、両親の追善や自身の生前供養（逆修）のために建てられた石の塔婆です。地域の中世を物語る史料として、古文書や遺跡の調査事例が少ない中で、寺の境内や墓所、集落裏の山林・畑から見つかる板碑は、貴重な金石文史料となっています。

故村田顧問は、中世史研究の一つとして、八千代市内の板碑の集成をライフワークにされておられました。

1. 八千代市の板碑集成と村田顧問

村田顧問は、昭和54年（1978）『八千代市の歴史』の市史編さん委員長を務められ、その第三章中世で128基の板碑を紹介された。その後、平成33年（1991）の『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』では150基、平成20年（2008）の『八千代市の歴史 通史編 上』では一覧表のみであるが171基を集成されている。

また村田顧問が八千代市郷土歴史研究会の活動の中で、新たに発見された次の板碑は『史談八千代』第3号・26・36号に速報としてそれぞれ報告された。

- ・1978年村上・正覚院の板碑11基と高本・湯浅節家の康永4銘板碑
- ・2001年上高野・金乗院の阿弥陀三尊種字板碑
- ・2011年萱田上ノ台・君塚長右衛門家墓の阿弥陀三尊種字板碑

2. 板碑とは

「板碑」とは、板状の石材に仏像を表す種子（しゅじ）や被供養者名や年月日を刻んだ石塔で、鎌倉時代から室町時代の仏教の供養塔である。

関東では、埼玉県を中心に広く分布する緑泥片岩を板状に加工した「武蔵型碑」と、利根川下流域に分布する雲母片岩製の大型の「下総型板碑」がある。

千葉県北部の板碑の種類は、(1)形態からは武蔵型板碑・下総型板碑、(2)本尊から

は図像板碑・種字板碑・題目板碑・文字や図像のない板碑がある。

(1) 形態から

①武蔵型板碑＝関東の板碑の多くは、秩父産緑泥片岩を使用し、頭部三角で二条線を刻み、薄く長細い形をした「武蔵型板碑」と呼ばれる板碑である。

鎌倉時代、荒川中流域（畠山・吉見・比企・川越氏の支配地）の武士団を中心に建立され、関東全域に広がった。埼玉県などでは、鎌倉時代の大型の武蔵型板碑も多数みられるが、時代が下がるにつれて、小型の簡略な板碑も多量に流通し、千葉県北部では戦国時代の終わりまで続く。なお、埼玉県小川町・長瀨町ではこれらの板碑の採石場遺跡が見つかっている。

②下総型板碑＝千葉県北部では、筑波石（黒雲母片岩）製で厚く大きめの「下総型板碑」と呼ばれる板碑が、香取市や成田市、印西市などに多く分布している。

八千代市内の下総型板碑は3点、そのうち一番大きな下総型板碑が神野の玉蔵院にある。

(2) 本尊から

①図像板碑＝阿弥陀三尊や一尊の姿を浮彫や線刻で表現。日本最古の板碑は嘉禄3年（1227）銘 阿弥陀三尊図像板碑（熊谷市須賀広）、八千代市内では未発見。

②種字板碑＝阿弥陀三尊（キリークと脇侍のサとサク）板碑、阿弥陀一尊（キリーク）板碑、十三仏板碑などがある。

八千代市内で阿弥陀三尊種字板碑は9基、一尊は82基で、キリークの字体は異体字のb類がほとんどである。八千代市内最古は、真木野妙徳寺の正応6年（1292）銘のキリークで、字体はa類である。

十三仏板碑は2022年に神野で初めて発見された。なお、千葉県内最古の十三仏板碑は、印西市吉高の羽黒十三仏堂の本尊として祀られている永和4年（1378）下総型板碑である。

③題目板碑＝「南無妙法蓮華経」の七字題目を刻む「一遍首題」の板碑、「南無妙法蓮華経」に「多宝如来」と「釈迦牟尼仏」の題目二尊、さらに「浄行菩薩」と「安立行菩薩」が加わった題目四尊板碑のほか、中央に七字 題目と二尊、四隅に四天王、左右に愛染明王と不動明王の種子、題目の下に鬼子母神と十羅刹女の文字を刻む十界曼荼羅の板碑がある。

千葉県北部の題目板碑の分布は、中山法華経寺のある八幡庄をはじめ、臼井庄のうち八千代市西北部と船橋市高根町などの旧神保郷、多古町の千田庄に集中している。

その背景として、千葉胤貞から養子の日祐（中山門流のトップ）へ、元徳3年（1331）その所領である千田庄・臼井庄・八幡庄内の一部の土地などの譲与が行われ、八千代市内では、嶋田村・真木野村・平戸村がその勢力下に入ったという歴史がある。（元徳三年九月四日「千葉胤貞譲状」『中山法華経寺文書』）

④文字や図像のない板碑＝種字と蓮座のみで、銘文のない板碑や、図像も全くない無刻の板碑も数多く見つかっている。これらは、未製品説（二次加工がされなかった）、後世の加工説（後から表面を削った）、粗雑な製品説などその理由は諸説ある。

3. その後の新発見

(1) 神野の土井昭雄家の板碑群

2020年2月、八千代市郷土歴史研究会の神野の総合研究の調査で、村田顧問が土井昭雄家所蔵の板碑群を発見。同6月に、村田顧問の指導により八千代市郷土歴史研究会で調査したところ、板碑およびその破片の数は121点、うち有刻の碑が31基あった。

このうち紀年銘のあるのは9基で、延文2年(1357)・延文3年(1358)・延文5年(1360)・長祿5年(1461)・寛正6年(1465)・文正2年(1467)2基・文明9年(1477)・文明10年(1478)である。

八千代市内既報告の板碑171基（下総型3基含む）のうち、年号のわかる57基に、今回の調査した9基を加えて年代別（20年毎）のグラフを図にしてみた。千葉県内の武蔵型板碑の紀年銘の消長については、初現が1250年代、第1ピークが14世紀中葉、第2ピークが15世紀後葉、終焉は1590年代と報告されているが、今回の調査事例もその二つのピークに一致し、全体の動向がより千葉県内の動向に近いものとなった。

この板碑群については『八千代市の歴史 通史編』の一覧表の171基の報告以降の大発見となり、『史談八千代』第45・46号で報告した。

(2) 八千代市内初の「十三仏板碑」の発見

昨秋の「ふるさとの歴史展」での板碑の特別展示がきっかけになって、神野の三橋家が所蔵する武蔵型板碑の断碑が新たに見つかった。碑面に十三仏の種字を彫り込んだ「十三仏板碑」で、造立時期は、十三仏の配列や蓮座の形状から天文年間(1532～55)と推定される。十三板碑は、八千代市内では初めての貴重な板碑であり、神野の板碑は1基増えて150基になった。

4. 村田顧問から私たちに託された課題

近年の板碑研究は、読みとられた銘文と梵字だけではなく、銘文の字体、梵字や蓮華座、花瓶などの荘厳具の形態なども分析対象として、編年や地域的な分布の把握が試みられている。

例えば、正覚院館跡の康応二年(1390)銘板碑は、簡略化された蓮座や花瓶が特徴の「蝶型蓮座板碑」に分類される。この種の板碑は多摩川下流域で多く見つかっていて、採石から加工消費までの地域が特定できる板碑とされているが、このような特徴を判断するためには、拓影または写真を伴った資料の公開が不可欠である。（『八千代市の歴史 通史編』P338）

八千代市内のすべての板碑について、村田先生が遺された拓本資料などを探し、現地再調査も含め、詳細な画像データを付した記録集を編纂・刊行していくことが、今求められている。

なお、八千代市内の板碑 171 点で拓影・写真が図示されているのは数点に留まる。今後は、全資料の拓影・写真の公開を進め、地域分布・流通・編年など研究に資することが求められていくと思う。

今、私たちがすべきことは、以下の通りである。

(1) 「板碑」についてよく知り、知らせていく。＝中世の貴重な史料である「板碑」のことを、展示や講演会などで市民に知ってもらい、さらに市内の旧村の畑や墓地での身近な「発見」につなげていきたい。

(2) 板碑調査のノウハウ（拓本・翻刻など）を学ぶ。＝板碑調査の基本は、きれいな拓本を採り、銘文を正確に読み取ることからはじまる。

(3) 調査結果（写真・拓本も）を公開していく。＝調査報告書は、銘文だけでなく、図像の細部の画像データが肝心である。他の地域との比較検討のためにも、公開していきたいと思う。

具体的には、『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』に記載された板碑資料 150 点について、1 点ごとの写真と拓本のデータの集成、『八千代市の歴史 通史編 上』の一覧表に追加された 21 点の拓本・写真・翻刻など詳細データの集成、『八千代市の歴史 通史編 上』刊行後の新発見の板碑の調査と記録を行っていきたい。

おわりに

村田一男顧問は、2021 年 5 月 11 日、「藤原時平を祭神としている高岡の天神様」を探索に行かれ、佐倉市高岡で未調査の板碑群を発見された。現地調査の大切さを説かれ、最後に「板碑の新発見」という置き土産を遺された村田顧問は、2021 年 8 月 6 日永遠の眠りにつかれた。八千代市の中世史解明の手掛かりになる板碑の集成を志しておられた村田顧問のご遺志を、私たちは継いでいきたいと思ひます。